

Title	章太炎に対する魯迅と芥川龍之介の評価 : 章太炎は「退いて静かな学者」になったのか
Author(s)	河田, 悌一
Citation	中国研究集刊. 4 P. 32-P. 39
Issue Date	1987-04-01
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/60764
DOI	10.18910/60764
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

章太炎に対する魯迅と芥川龍之介の評価

——章太炎は「退いて静かな学者」になったのか

河田 悌一

I

思想家や文学者についての学術的研究は、その人物の生まれた母国の研究が一番すぐれているとは、必ずしも言えない。

十八世紀フランスの啓蒙思想家ルソー（一七一二～七八）の研究は、フランス以外にも多くのすぐれた研究があるし、マルクス（一八一八～八三）の研究は、かれの母国ドイツよりもむしろイギリスや日本の研究のほうがすぐれている。また、中国を含めた社会主義国のマルクス研究は、毛沢東研究と同様に、マルクス主義をドグマとして見ているために、魅力の乏しいものとなっている。

もちろん、その思想家なり文学者なりに関する事実の新発見ということからすれば、その人物の生まれた国の研究に、一日の長のあることは、言うまでもない。しかし、その人物の思想、歴史的意義づけといった、事実のもつ意味の解釈・分析につい

ては、その母国の研究が最高のものだ、とは言えないのである。中国の文学者魯迅（一八八一～一九三六）、あるいは先頃逝去した丁玲（一九〇七～八六）の研究についても、そう言えるのではないだろうか。

たとえば最近、北京大学出版社から刊行された楽黛雲編『国外魯迅研究論集（一九六〇～一九八一）』（一九八一年刊）、あるいは、『丁玲研究在國外』（湖南人民出版社、一九八五年刊）を見てみると、そういう印象をつよくもつ。本書『国外魯迅研究論集』には、ウイリアム・ライル『魯迅の現実観』（カリフォルニア大学出版）など七篇のアメリカー人の研究、竹内実『魯迅遠景』など五冊の日本人の著作、さらにはソビエト、チェコスロバキア、オランダ、カナダ、オーストラリアなど合計十九篇の文章が中国語に翻訳されている。

そして、それぞれの文章は、いずれも魯迅その人をなま身の人間として描いており、読者の知的好奇心を十分満足させてく

れる。

それについて、中国の魯迅研究の論文は、おそらく新中国成立以後、ゆうに千篇を越す著作論文が発表されているだろう。が、大刀闊斧にこれを言うならば、千篇一律の感があるように思われる。

外国の読者のみならず、中国の人びともまた、おそらくそういう感想を持っているのではなからうか。では、読者にそういう印象を与えるのは、なぜか。

それは中国の魯迅研究、とりわけ近現代の人物についての研究の方法論が、「唯物主義か唯心主義か」といった二分法、「進歩か保守か反動か」という三分法、章太炎の場合なら「資産階級的地主階級のか農民階級のか」という類型化が主流であるためである。その方法がきわめて一面的でありすぎるのだ。そして、さらに言うならば、あまりに安易に、歴史上の人物のその名前の上に形容詞を付して、レッテルを貼りすぎるのである。たとえば——、「偉大的民主革命先行者、孫中山先生」「資産階級革命家、章太炎」、これならまだですが、「偉大的領袖、偉大的導師、偉大的統帥、偉大的舵手、毛主席」（この言い方はもう流行らないかも知れないけれど……）、「中国共産主義運動的先駆、傑出的共産主義戦士、無産階級革命家李大釗同志」、「中国文化革命の主将、偉大的文学家、偉大的思想家、偉大的革命家、魯迅先生」……などなど、という具合に。読む以前から、読者は読む気力をなくしてしまいうわけである。

とりわけ、魯迅については、毛沢東が魯迅に対して高い評価を与えて以来、中国ではいわゆる「魯迅神話」と言ってもよいほどの状況が見られるのではないだろうか。私は魯迅の文章が好きであるし、かれが素晴らしい文学者だとは認めるが、それでもそう言わざるを得ないのである。

たとえば魯迅の章太炎評価もまた、偉大な文学者であった魯迅のこととはとして、そのまま信用されすぎてきたのではないか。そのことばとは、何か。

それはすなわち、魯迅がその死の十日前、かつての師であった章太炎を追悼して書いた、情誼に溢れた文章「太炎先生に關する二、三のこと」のかの有名な一節である。

太炎先生は以前こそ革命家として姿を現わしていたが、後には退いて静かな学者となり、自分の手でも作っていたし、ほかの人にも作ってもらった扉でもって、時代と隔絶してしまつた。

さらにまた、同じ文章の中にある「民衆と離れて次第に頹唐に入った」「粹然として儒宗となつた」ということばである。

この魯迅のことば、章太炎に対する評価を継承して、中国の研究者たちは、章太炎は晩年つまり一九一九年の五四運動以降、民衆を離れ、政治に絶望し、伝統的學術の世界に回帰し、時代と隔絶した——と評価するのである。

昨年出版された姜義華教授の労作『章太炎思想研究』（全六八八頁、上海人民出版社、一九八五年八月刊）は、先の魯迅の

有名なことばを引用して、第九章のタイトルを「即離民衆、漸入頹唐的晩年思想与學術」と名づけ、

章太炎が時代の落伍者となり、「退いて静かな学者」となった所以は、「民衆から離れ」たことによるので、喜怒哀楽がもはや民衆とは通じなくなった、このため「時代と隔離して」しまったのだ。

とのべる。

だが果たして、魯迅の評価したように、章太炎は政治をすてて静かな学者となり、民衆から離れて次第に頹唐に入った、と言いつつよいものか。

近代日本を代表する文学者であった芥川龍之介（一八九二～一九二七）は、章太炎にたいして、魯迅とは異なった印象をもっている。

芥川龍之介は、一九二一年三月二十八日に日本を出発、七月十二日に中国を離れるまで、およそ百二十余日間、大阪毎日新聞社の海外視察員として中国を旅した。かれは中国で、上海、杭州、蘇州、揚州、鎮江、南京、九江、廬山、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などの地を訪れ、帰国後まもない八月十七日から二十一日間にわたって「上海游記」を執筆している。（なお、芥川は一九二二年一月～二月には「江南游記」、一九二五年六月に「北京日記抄」を書き、「上海游記」と合わせて一九二五年十一月、改造社から『支那游記』と題して出版している。）

十九世紀末以降、日本の文学者、思想家、新聞記者などが書いた中国旅行記はおそらく数百種を数える（東洋文庫近代中国研究委員会編『明治以降日本人の中国旅行記』参照）が、この芥川の旅行記は、内藤虎次郎（号は湖南、一八六六～一九三四）の『支那漫遊燕山楚水』（博文館、一九〇〇年刊）、徳富猪一郎（号は蘇峰、一八六三～一九五七）の『支那漫遊記』（民友社、一九一八年刊）、鶴見祐輔（一八八五～一九七三）の『偶像破壊期の支那』（鉄道時報局、一九二三年刊）などとともに、第一級の中国旅行記である。

この旅行の間に、芥川龍之介は章太炎、鄭孝胥、李人傑、辜鴻銘などと会見してその印象を記録している。

また昨年九月出版された『胡適的日記』（中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編、中華書局香港分局刊）を読むと、一九二一年六月二十七日の条に、胡適は「八時、到扶桑館、芥川先生請我吃飯」と記し、芥川と「中国旧劇」と「中国とフランスの詩」などについて語り合っている。が、残念なことに、芥川自身は胡適との会食について何の記録をも残していない。

さて芥川は、上海で章太炎を訪れ、会談した印象を次のようにのべている。

（章炳麟）氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社会の問題だった。

まさしく芥川龍之介が書いているとおり、章太炎は「静かな学者」などではなかった。一九二〇年秋から、太炎は「各省の

自治を第一歩とし、連省自治を第二歩とし、連省政府を第三歩となす」という、いわゆる連省自治方式によって軍閥混戦の当時の中国に、安定した政府を樹立しようと考えていたのである。

この連省自治論は、現在の中国では評判のよからぬ政治的主張とみなされている。だが、若き毛沢東も一時期、この連省自治論に関心をよせ、積極的にこれを鼓吹したことがある。一九二〇年九月から十一月にかけて、毛沢東は『長沙大公報』に「湖南建設の根本問題——湖南共和国」（九月三日）を発表して以来、十篇余りの湖南省自治に関する論文を発表、連省自治の推進を主張したのであった。ただ、このような省自治方式が各省で実際におこなわれると各省の軍閥支配を強化する恐れが出て来たため、毛沢東はまもなく「連省自治に反対」を表明することになる。

だが章太炎は、一九二〇年から二七年にかけて、湖南をその中心として四川などの西南各省、さらに江蘇、浙江など江南各省と連絡をとり、この連省自治方式による中国統一政策を真剣に考えた。そしてその実現のために、各地の政治家、名士に手紙を書き、電報を打ち、あるいは、実際にその地に足をほんで面談している。

そうした章太炎の言論政治活動の軌跡は、湯志鈞先生の名著『章太炎年譜長編』によって、われわれは逐一たどることができ、また昨年十一月二十四日、不幸にも急逝された李潤蒼教授の論文「章太炎と・聯省自治・」（『論章太炎』四川人民

出版社、一九八五年二月刊）に詳しい。しかし、章太炎の政治活動——連省自治の主張は、現在の中国では評判が芳しくない。

それはなにゆえか。それはほかでもない。当時の章太炎の連省自治の主張が、中国共産党の政策とまっこうから対立するものであっただけではなく、かれが声高に共産党に反対し、孫文に反対したからであった。

芥川龍之介に章太炎はこう言う。

支那の国民は、元來極端に趨（む）く事をしてない。この特性が存する限り、支那の赤化は不可能である。成程（なるほど）一部の学生は、勞農主義を歓迎した。が、学生は即ち国民ではない。彼等さへ一度は赤化しても必ず何時かはその主張を抛（な）つ時が来るであらう。

このように、芥川に向かって章太炎は、ひっきりなしに「爪の長い手を振りながら、滔滔と独特の説を述べた」という。そう芥川に語った章氏が、共産党はロシアの手先だ、と毛嫌いし、国共合作に反対したことは歴史上の事実である。

そうした「打倒赤化」を唱える「反動的な？」章太炎であったが、かれは都市のインテリは農村を軽視していると不満の意を露わにし農村改革を真剣に考えていた。のみならず、かれは一九三一年の九一八（満州事変）以後、日本の侵略に反対して立ち上った学生の愛国運動に同情をよせ、北上して抗日を説いたのであった。

芥川龍之介に対して、章太炎はさらに次のように語っている。

支那を復興するには、どう云ふ手段に出るのが好いか？

この問題の解決は、具体的にはどうするにもせよ、机上の学説からは生まれる筈がない。古人も時務を知るものは俊傑なりと道破した。一つの主張から演繹せずに、無数の事実から帰納する、——それが時務を知るのである。時務を知った後に、計画を定める、——時に循つて、宜しきを制すとは、結局この意味に外ならない。……

わたしは、章太炎は魯迅がのべたように、「退いて静かな学者になつた」のではなく、その晩年まで常に政治に関心を抱き続けた、經世済民の道を歩み続けた実践の人であり、行動的学者であり、「学問ある革命家」であり続けた人であつた、と考へる。それがたとえ、中国共産党の当時とつていた道と異なつたものであつたとしても……。

II

右の文章は、一九八六年六月、浙江省杭州市で開催された「章太炎先生逝世五十周年紀念學術討論會」に提出した原稿の日本語の原文である。学会ではこの文章を忠実に中国語に翻訳し（三三頁上段一八行目の「この言い方はもう流行らないかも知れないけれど……」の一句は削り）、約二十分かけて口頭で発表した。発表に先立って、わたしは、

「第二次世界大戦後の、ブルジョア民主主義教育のもとに成

長したため、われわれの年代のものは、百家争鳴の雰囲気
で研究工作をおこない、いつも好き勝手に討論（隨便討論）し
ております。それゆえ中国の学者の方々に對して、いささか礼
を失するところがあるかも知れませんが、もし無礼の段があり
ましてご海容の程に存じます」

と前おきして、この発表をおこなつた。

というのは、中国のマルクス主義、毛沢東研究が魅力に乏しい、とか、魯迅研究は千篇一律の感がある、とか、いささか率直に心情を吐露しすぎ、言わずもがなのきらいがあると考へたからであつたが、しかしわたし自身としては、外国人研究者のわたしがわざわざ中国の学会に出かけていって、当りさわりのないことをのべるよりも、日頃思っていること感じていることをはっきり申しのべた方がよい、と考へたのだった。

華中師範大学の章開源学長の司会で、わたしは発表したが、すぐさま、中国のある学者から、お前の魯迅評価はきびすぎると、魯迅のこの太炎評価があつたればこそ、こんにち太炎はいまなお尊敬されているのだ——といった趣旨の反論が出された。が、発表後、会場の外で復旦大学の朱維錚教授はタバコの煙をくゆらせながら、自分は提出論文ではほぼ同じ主張をしている、意を強くした、とのべた。のみならず、その晩、わたしの部屋をノックして訪れた年若い研究者はわたしの発表に賛意を示し、中国にはまだタブーが多すぎる、とのべた。

だが、わたしが問題にした章炳麟と中国共産党の関係につい

ては、翌日の分科会でも、それに触れるひとは誰もなかった。

一九八六年八月十三日付けの『光明日報』紙は、同学会の秘書長を勤めた胡国枢氏（浙江省社会科学学院歴史研究所）の署名入りで、以下のような記事を掲載した。

（一九八六年六月十四日は近代の文化名士、章太炎先生の逝去五十周年であったが、かれの学術、思想の研究を深めるために、その故郷の杭州市で四日間わたる学術討論会が開かれた。このたびの学術討論会では、史学、哲学、政治、文学、言語文学、仏教学、医学、経済学、法学など多方面に論議がおよび、章太炎研究の領域を広げた。

この討論会では、章太炎の晩年の評価について熱のこもった意見の交換がなされた。

復旦大学の朱維錚はかれの論文「晩年の章太炎」で、日本の関西大学河田梯一教授は「章太炎は、退いて静かな学者。になったのか——章太炎にたいする魯迅と芥川龍之介の評価」でいずれも、魯迅の「太炎先生に関する二、三のこと」の章太炎評価は、章氏にたいする「棺を蓋いて論定まる」決定的評価とみなすことはできぬし、史実にもとづいて新たに評価を下さねばならぬ、と論じた。

これにたいして、何人かの学者はこの種の見方に同意せず、魯迅の章太炎にたいする・評語・は史実に合致した確実な見解（真知灼見）だ、とかさねて表明した。』

ともあれ、わたしの投じた一石は中国の学会に波紋を投げか

けたのであり、中国の学会に参加した意義はまがりなりにもあった、とおもわれる。

なおこの学会については、すでに「朝日新聞」（一九八六年八月十九日夕刊）に「文人革命家『章炳麟シンポ』に参加して」と題して紹介したことがあるので、以下にはその日程と参加者の提出論文名をかかげて参考に供することにする。

a 日程

六月十四日 午前9時より杭州飯店小礼堂にて浙江省政治協商会議・王家揚主席主催の「章太炎先生逝世五十周年紀念（追悼）会」、終了後、西湖畔の章氏墓地に参詣。午後、サイド・カー先導のもと、乗用車、マイクロバス十数台をつらねて余杭県の「章太炎故居」を見学。夜、西湖畔の「樓外樓」にて宴会。

六月十五日 杭州市郊外の望江山療養院を宿舎と会場にして「学術討論会」。午前の発表者は(1)呉文祺、(2)汪榮祖、(3)姜義華、(4)近藤邦康、(5)朱季海、(6)唐文權、(7)李慎行、(8)孔繁。午後はひきつづき、(9)唐文、(10)河田梯一、(11)湯志鈞、(12)許冠三、(13)王寧、(14)饒欽農が発表をおこなった。

六月十六日 午前八時四十五分から十一時二五分まで、午後二時から五時まで、史学、哲学、文学に分かれて分科会、昨日の各発表について、各人の見解を自由に交換した。

六月十七日 一日、参加者主催者（百余名）で紹興見学。

六月十八日 午後二時～五時、閉会式。各分科会での討論の結果を、史学は朱維錡、哲学は呉光、文学は饒欽農各氏が総括したほか、章氏の孫章念馳氏（上海社会科学学院歴史研究所）が『章太炎全集』など章氏の著作資料の編集事業について報告。また章氏の墓地近くに建設予定の「章太炎紀念館」についての紹介などがあり、盛会のうちに幕を閉じた。

b 提出論文目録

- (1) 唐文権（華中師範大学歴史研究所）「論章太炎思想的な主要特点及其歴史地位」
- (2) 孔繁（中国社会科学院宗教研究所）「章太炎『煇書』重訂本对中国学術思想變遷の評價」
- (3) 羅福惠（華中師範大学歴史研究所）「章太炎与宋明理学」
- (4) 呉光（浙江省社会科学学院哲学研究所）「試論章太炎哲学思想的轉變及其原因」
- (5) 袁偉時（中山大学哲学系）「辛亥革命与章太炎哲学思想的變化」
- (6) 熊月之（上海社会科学学院歴史研究所）「早年章太炎与西学」
- (7) 徐和雍（杭州大学歴史系）「章太炎与中国近代民族文化」
- (8) 胡珠生（温州市図書館）「章太炎的反清思想」
- (9) 黎振国（上海社会科学学院哲学研究所）「章炳麟与経今文学」
- (10) 鄭雲山（杭州大学歴史系）「孫中山与光復会」
- (11) 陶士和（杭州師範学院政史系）「試論武昌起義後の孫章關係」
- (12) 李希泌（北京図書館『文獻』編輯部）「章太炎先生史学的核心——通史致用」
- (13) 袁英光（華東師範大学史学史研究所）「從『煇書』到『檢論』看章太炎史学思想演變」
- (14) 金德建（上海社会科学学院歴史研究所）「章太炎先生晚年講学与愛国主義精神」
- (15) 呉鏡（蘇州大学歴史系）「太炎先生在蘇州」
- (16) 王鳳賢（浙江省社会科学学院）「一位“有学問的革命家”——評魯迅論章太炎」
- (17) 呉文祺（復旦大学中文系）「論章太炎の文学思想和他的文章」
- (18) 周双利（内蒙古民族師範学院）「試論章太炎の国学」
- (19) 王有為（上海人民出版社）「章太炎与『民報』」
- (20) 胡国枢（浙江省社会科学学院歴史研究所）「章太炎与興浙会」
- (21) 鄒身誠（浙江大学）「簡論章太炎的『煇書』——中国歴史上最上の旧民主革命理論性專著」
- (22) 易夢虹（南開大学国際経済系）「試論章太炎貨幣思想」

- 中的合理內涵」
- (23) 饒欽農（湖北大學古籍研究所）「太炎文錄統編校點說明」
- (24) 饒欽農「章太炎『說文部首韻語』古今音注」
- (25) 魏皓奔（杭州市社會科學研究所）「試論章太炎的法律思想」
- (26) 林乾良（浙江中醫學院）「章太炎先生醫學思想論析」
- (27) 姜義華（復旦大學歷史系）「章太炎與中國文化的現代命運」
- (28) 張苓華（魯迅博物館研究室）「太炎先生東京講學及其對魯迅的影響」
- (29) 史奔（浙江省文物局）「論魯迅對章太炎的評價——兼論魯迅的人物觀」
- (30) 陸宗達·王寧（北京師範大學中文系）「章太炎與中國的語言文字學」
- (31) 湯炳正（四川師範大學中國古代文學研究所）「從『成均圖』看太炎先生對音學理論的建樹」
- (32) 韓旭鈺（杭州外國語學校）「章太炎和魯迅」
- (33) 唐文（蘇州鐵道師範學院）「國故論衡小學之部疏証自序」
- (34) 崔富章（浙江圖書館）「『煇書』版本述略」
- (35) 崔富章「關於『秦獻記』的主題及其它」
- (36) 胡學彥（浙江人民出版社）「校勘『章太炎生平與思想研究文選』所想到的」
- (37) 謝棟允（遼寧教育學院中文系）「『嶺外三州語』疏証」
- (38) 陳冬輝（浙江師範大學中文系）「『說文部首韻語』簡注」
- (39) 汪榮祖（パーシニア理工大學歷史系）「試論章太炎的文化觀」
- (40) 近藤邦康（東京大學社會科學研究所）「章太炎與日本」
- (41) 河田佛一（關西大學文學部）「章太炎是否·退居于寧靜的學者·呢？——魯迅和芥川龍之介對於章太炎的評價」
- (42) 朱季海「古文式武說從弋說——附叢必說機弋」
- (43) 吳嘉勳（上海社會科學院歷史研究所）「論章太炎辛亥革命時期的國家學說」
- (44) 廖名春（武漢大學中文系研究生）「試論章太炎的尊荀」
- (45) 朱維鏞（復旦大學歷史系）「關於晚年章太炎」
- (46) 徐復（南京師範大學）「讀『煇書』雜誌」
- (47) 李慎行（寶雞師範學院中文系）「從章太炎先生對待清儒研討金、甲文字的態度中汲取教益」
- (48) 董國炎（山西大學古典文學研究所）「章太炎文學觀考辨二題」
- (49) 姚奠中（山西大學古典文學研究所）「·學問·、·革命·一身二任」